

# 小野小町

『新・やまと物語』(<https://www.shinyamato.net>)から、一部抜粋

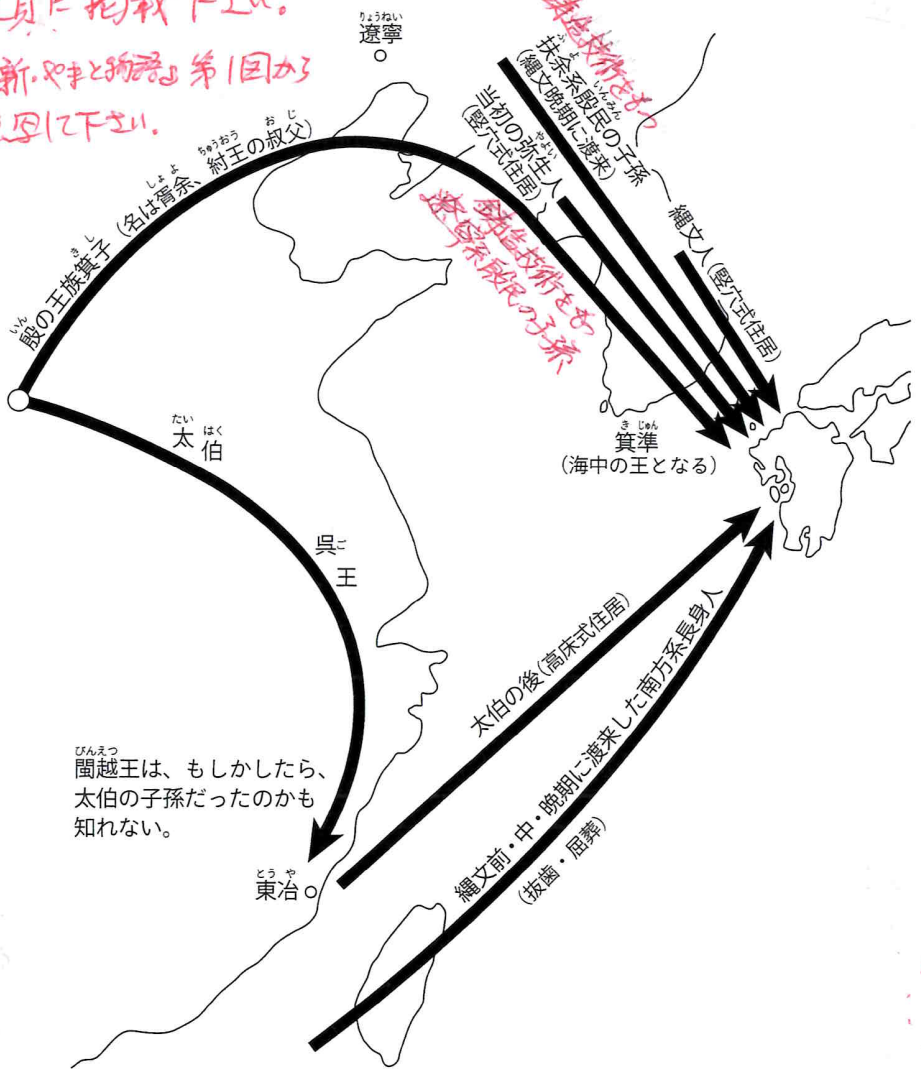
古閑炯作(こがけいさく)







・左頁に掲載下さい。  
 ・『新・ヤマト物語』第1回が  
 転写して下さい。



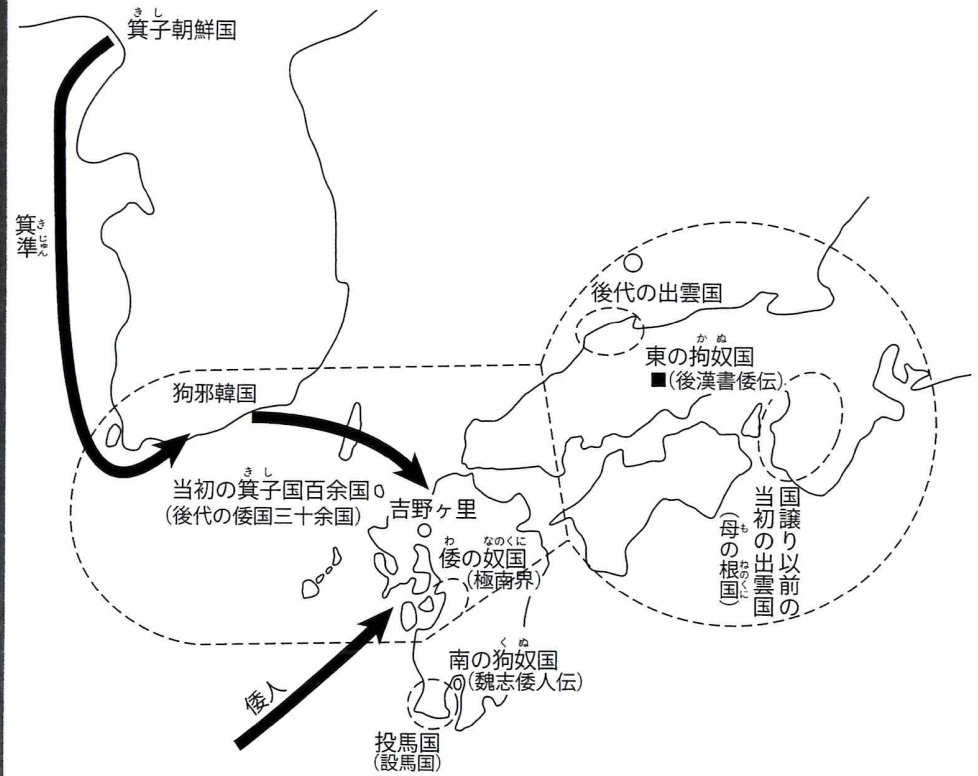
第1図 六つばかりの種族 (想像図)

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期	前300		縄文人		
弥生時代	前期	-前200	<ul style="list-style-type: none"> <li>前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。</li> <li>前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。(『三国志』韓伝) (7~80年)</li> </ul>	【箕子達による】 百余国の時代		
	中期	B.C. A.D.	<ul style="list-style-type: none"> <li>前104頃、倭人東遷開始か。</li> <li>前97、崇神天皇即位(紀)</li> </ul>	倭奴国(極南界)		
	後期	-100	<ul style="list-style-type: none"> <li>57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。</li> <li>107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。</li> </ul>	(小銅鐸廃絶)		
	古墳時代	-200	<ul style="list-style-type: none"> <li>147 } 倭国大乱</li> <li>188 }</li> <li>239、卑彌呼、魏国へ朝貢。</li> <li>248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。</li> </ul>	【倭人による】 30余国の時代		
古墳時代	前期	-300		男王素(素戔嗚)を追放。素、母の根国を建国。(近畿に古墳出現)		
		-400	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)	(倭人による統一) 出雲国の国譲り [現在の出雲国へ国替え] (銅鐸廃絶)		

〔注〕 当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。  
 (『吉野ヶ里』安本美典、毎日新聞社、156~7頁参照)

- ・ 右頁に掲載
- ・ 『新・やまと物語』第2図から転写



第2図 東西二つの文化圏の対立 (想像図)

第2表 前300年ころを中心とする朝鮮半島の歴史と日本の歴史との対比 (想像)

遼寧地方	朝鮮半島	北九州・山口地方 中国・近畿地方
<p>殷</p> <p>前1100</p> <p>前1100年頃、周に破れた殷民が、遼寧・扶余地方等へ移住したのであろう。</p> <p>○赤褐色の無文土器</p> <p>○銅剣</p> <p>○銅矛</p> <p>○銅戈</p> <p>○銅鏡</p> <p>○銅鉈</p> <p>○環墳墓</p> <p>○石棺墓</p> <p>○土塚墓</p>	<p>新石器時代 櫛文土器時代</p> <p>殷民に追われた者達が、遼寧・扶余地方等から朝鮮半島へ流入したのであろう。</p> <p>○無文土器</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・黄褐色で文様は無い。</li> <li>・彩色土器も出土。</li> <li>・回転台や陶車を使わない平底の土器。</li> <li>○本格的な農耕が始まる。</li> <li>・石廬丁が代表的。</li> <li>○低い丘陵に集落形成。</li> <li>○隅丸長方形の竪穴式住居。</li> <li>○方形周溝墓が多数発見されつつある。</li> </ul>	<p>縄文時代</p> <p>縄文晩期</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・箕子とは別系統の殷民(扶余系殷民)の子孫渡来か。</li> <li>・殷滅亡の紀元前1100年以後あまり年月を経ていないある時、扶余(今の満州)あたりから、韓国南西部の扶余郡『松爾里遺跡』の地、および日本列島(北九州・中国・近畿地方など)へ渡来したのと思われる。</li> <li>●胎土に石粒を含む黒っぽい土器。</li> <li>・夜臼式土器、刻目突帯文土器、他。</li> <li>●高度な稲作技術(板付遺跡『水田』の下層調査により判明)</li> <li>●石廬丁</li> <li>●環墳墓(九州・近畿(大阪府茨木市立文化財資料館冊子参照)の高地域に見られる)</li> <li>●支石墓</li> <li>●環塚</li> </ul>
<p>前403</p> <p>遼寧地方には、箕子の子孫達が居住したと思われる。</p> <p>○赤褐色無文土器、銅剣、銅鏡、鉈等が出土する。</p>	<p>無文土器時代 前期</p> <p>【扶余郡松爾里遺跡等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●青銅器の鋳型が出土した。</li> <li>●ジャコニ方種の炭化米が出土。</li> <li>●環塚が見られる。</li> <li>●円形・隅丸長方形の竪穴式住居が混在する。</li> </ul> <p>○箕子の子孫達に追われた者等が、朝鮮半島から、日本列島へ大挙して移住したのであろう。</p> <p>○日本に弥生時代が始まる。</p>	<p>●胎土に石粒を含む黒っぽい土器。</p> <p>●夜臼式土器、刻目突帯文土器、他。</p> <p>●高度な稲作技術(板付遺跡『水田』の下層調査により判明)</p> <p>●石廬丁</p> <p>●環墳墓(九州・近畿(大阪府茨木市立文化財資料館冊子参照)の高地域に見られる)</p> <p>●支石墓</p> <p>●環塚</p> <p>○扶余系殷民の子孫達は、前300年頃、当初の弥生人の支配下に置かれたと解される。</p>
<p>戦国時代</p> <p>前300</p> <p>○箕子の子孫達が、遼寧地方から北朝鮮へ移住したと考えたい。</p> <p>○燕に奪われる。</p>	<p>青銅器時代 後期 (I期)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○銅剣・銅矛・銅戈・銅鏡・鉈などが墓内から出土。</li> <li>○鋳造製の鉄斧・鉄鎌なども出土。</li> <li>○環塚。</li> <li>○(隅角)長方形の竪穴式住居。</li> <li>○環塚は不明。</li> </ul> <p>箕準、韓王となる。</p> <p>箕準、海中の王となる。</p>	<p>当初の弥生人</p> <p>(遠賀川式土器)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・板付I式、板付II式等の弥生前期土器の総称。</li> <li>・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。</li> </ul> <p>○弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・茶褐色の明るい色調。</li> <li>・縄文式土器に比べると、文様は少ない。</li> <li>・彩色されることもある。</li> <li>・陶車などを利用しない輪つみ法。平底。</li> <li>○本格的な農耕が行なわれる。</li> <li>・石廬丁が代表的。</li> <li>○低い丘などに集落を営む。</li> <li>○隅丸長方形の竪穴式住居。</li> <li>○副葬品・木棺等を伴わない方形周溝墓が多数作られた。</li> </ul>
<p>前256周滅亡</p> <p>前221秦の天下統一</p> <p>前206</p> <p>前202</p>	<p>前180</p> <p>衛氏朝鮮国時代</p> <p>前108</p> <p>前100</p> <p>青銅器時代後期 (II期)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○青銅器</li> <li>○銅剣・銅矛・銅戈・小形銅鐻(馬鐻)等が土塚墓に埋納されている。</li> </ul> <p>初期鉄器時代</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○鋳造製の鉄利器も墓内に埋納されている。</li> </ul> <p>○北朝鮮に留まった箕子一族の者達の習俗だったのであろう。</p>	<p>○弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・茶褐色の明るい色調。</li> <li>・縄文式土器に比べると、文様は少ない。</li> <li>・彩色されることもある。</li> <li>・陶車などを利用しない輪つみ法。平底。</li> <li>○本格的な農耕が行なわれる。</li> <li>・石廬丁が代表的。</li> <li>○低い丘などに集落を営む。</li> <li>○隅丸長方形の竪穴式住居。</li> <li>○副葬品・木棺等を伴わない方形周溝墓が多数作られた。</li> </ul> <p>○弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・茶褐色の明るい色調。</li> <li>・縄文式土器に比べると、文様は少ない。</li> <li>・彩色されることもある。</li> <li>・陶車などを利用しない輪つみ法。平底。</li> <li>○本格的な農耕が行なわれる。</li> <li>・石廬丁が代表的。</li> <li>○低い丘などに集落を営む。</li> <li>○隅丸長方形の竪穴式住居。</li> <li>○副葬品・木棺等を伴わない方形周溝墓が多数作られた。</li> </ul>
<p>前漢</p> <p>8</p> <p>23</p> <p>25</p> <p>後漢</p>	<p>前漢時代</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○墓制</li> <li>○環墳墓</li> <li>○石棺墓</li> <li>○土塚墓</li> <li>○支石墓</li> </ul> <p>○身分の差による違いかどうか、不明。</p> <p>○墓内に青銅器等を埋納。</p> <p>○版築の技術が見られる。</p> <p>○環塚がめくらされる場合もある。</p> <p>○夜臼(ゆうす)式土器の上に茶褐色の土器(弥生時代当初の土器)があり、その上に赤褐色の土器(須玖式土器を代表とするもの)がある。(『季刊考古学』第19号、1987年5月1日発行、雄山閣、24頁。他参照)</p> <p>○箕子達の100余国内の極南界から倭奴国台語</p>	<p>○弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・茶褐色の明るい色調。</li> <li>・縄文式土器に比べると、文様は少ない。</li> <li>・彩色されることもある。</li> <li>・陶車などを利用しない輪つみ法。平底。</li> <li>○本格的な農耕が行なわれる。</li> <li>・石廬丁が代表的。</li> <li>○低い丘などに集落を営む。</li> <li>○隅丸長方形の竪穴式住居。</li> <li>○副葬品・木棺等を伴わない方形周溝墓が多数作られた。</li> </ul> <p>○弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・茶褐色の明るい色調。</li> <li>・縄文式土器に比べると、文様は少ない。</li> <li>・彩色されることもある。</li> <li>・陶車などを利用しない輪つみ法。平底。</li> <li>○本格的な農耕が行なわれる。</li> <li>・石廬丁が代表的。</li> <li>○低い丘などに集落を営む。</li> <li>○隅丸長方形の竪穴式住居。</li> <li>○副葬品・木棺等を伴わない方形周溝墓が多数作られた。</li> </ul> <p>○弥生式土器</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・茶褐色の明るい色調。</li> <li>・縄文式土器に比べると、文様は少ない。</li> <li>・彩色されることもある。</li> <li>・陶車などを利用しない輪つみ法。平底。</li> <li>○本格的な農耕が行なわれる。</li> <li>・石廬丁が代表的。</li> <li>○低い丘などに集落を営む。</li> <li>○隅丸長方形の竪穴式住居。</li> <li>○副葬品・木棺等を伴わない方形周溝墓が多数作られた。</li> </ul>

○次第に、明るい土器へと変わってゆく。

○唐古・池上曾根等には、扶余系殷民が住んでいたと思われる。

○唐古・鍵遺跡から黒っぽい弥生式土器が出土する。

(7) [注] ●印は、「扶余系殷民の子孫達の遺物・遺構」と解釈してみたい。

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

・右頁に掲載下さい。  
 ・『新・史学』第1巻が  
 転写して下さい。

時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
		前200	・前190頃、箕子朝鮮国奪われる。 箕子は、南韓の王となる。 ・前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。 (『三国志』韓伝)	【箕子達による 百余国の時代】		
	中期	前100	・前104頃、倭人東遷開始か。 ・前97、崇神天皇即位(紀)	倭奴国(極南界)		
		B.C. A.D.		(1)		
		57	極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。	赤い点線を引き<と>の (破線) ↓(2)		
後期	107	倭の奴国、再び後漢へ朝貢。	黒字 かみかみけい の衰微衰退 (小銅鐸廃絶)			
	147 188	倭国大乱	【倭人による 30余国の時代】			
古墳時代		239	卑彌呼、魏国へ朝貢。	【男王卑彌呼素】 男王素(素戔鳴)を追放。 素、母の根国を建国。 (近畿に古墳出現)		
		248(?)	卑彌呼死。徑百余歩の塚が作られた。	【男王卑彌呼素】 →【男王卑彌呼素】		
			(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)	当初の出雲国 「母国」(ものくに) (倭人による統一) 出雲国の国譲り [現在の出雲国へ国替え] (銅鐸廃絶)		
		-400-				

追加の文字  
赤色。  
字の大きさは、他と同じ。  
ついで、近畿地方の高度な文化と、  
次の古墳時代とが、スナリとは  
つながらない。

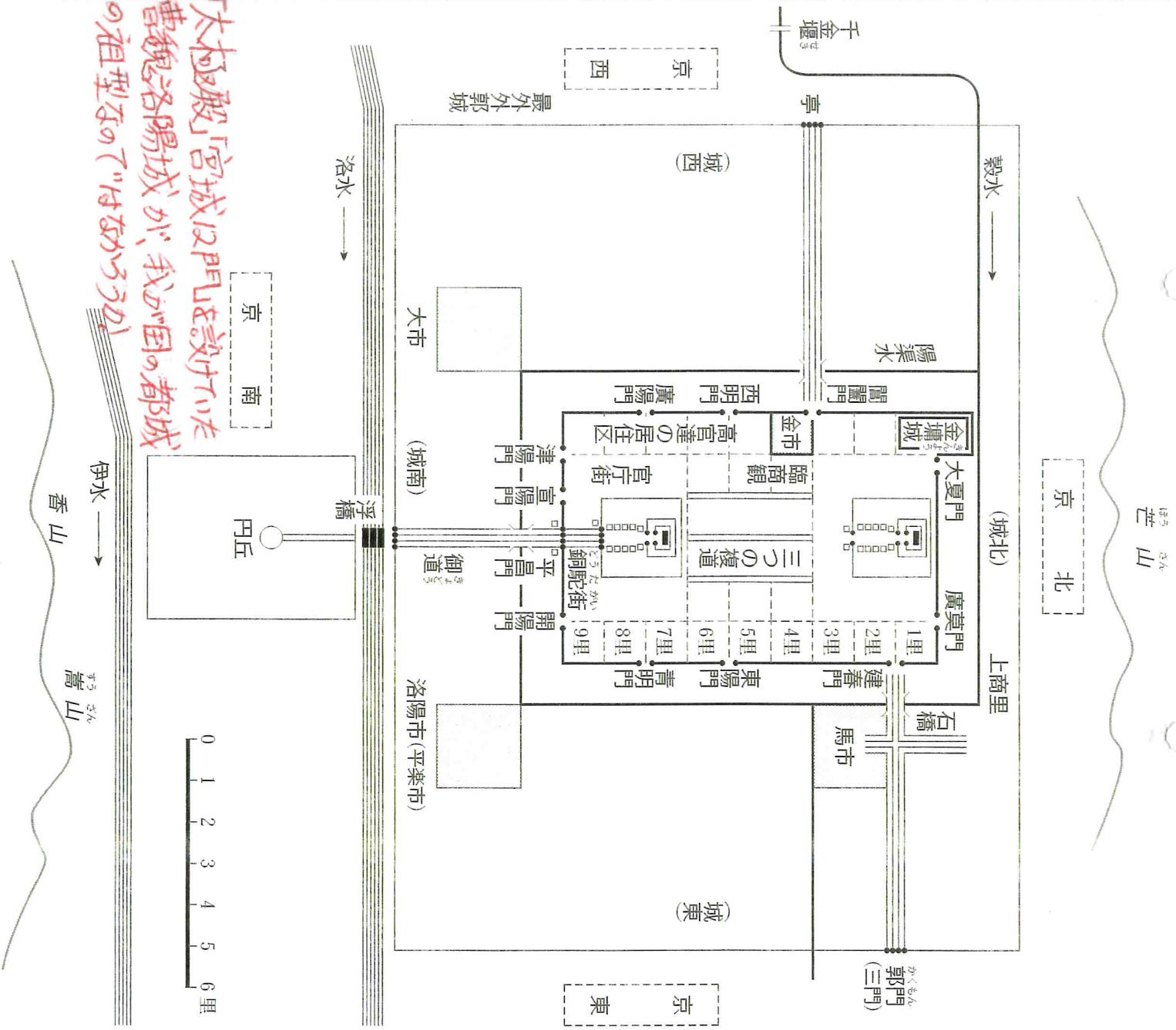
[注] 当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。  
 (『吉野ヶ里』安本美典、毎日新聞社、156~7頁参照)





第12図 曹魏の洛陽城を模した「邪馬台国の都」想像図

[注]「白川中流域一帯に前方後円墳が無い」ということが注目される。



第9図 曹魏洛陽城想像図

- [注] ①宮城『九六城』には「十二の宮城門」が設けられていた。  
 ②曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。  
 ③「宮城内に高官達の邸宅が並び、洛水の北側（宮城外）に市場を始めとする様々な施設があった」ということが、諸文献から分かる。  
 ④最外外郭城内に一般庶民が住んだのであろう。

(10)

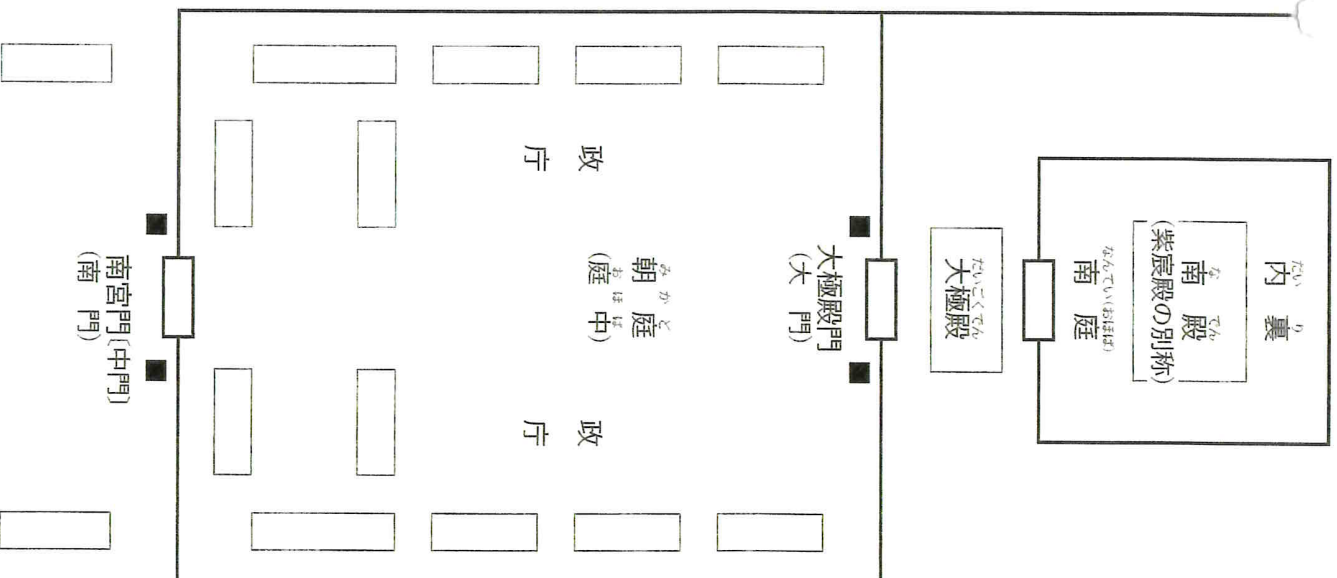


第13図 邪馬台国の「洛陽城」想像図

- 【注】①曹魏代の宮城（九六城）の城壁には、「十二の宮城門」が設けられていた。また、曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。
- ②一方、『日本書紀』皇極天皇四年六月条には、「大極殿」や「十二の通門」の記載がある。
- ③合志原の『大池』『小池』について、「聖徳太子当国に《五ヶ所の池》を穿ち給ひし一なりといふ」と言い伝えられている。（『菊池郡誌』熊本県教育会菊池郡支会、名著出版、昭和48年1月発行、377頁〈大池小池〉参照）

※昭和42年6月30日付、国土地理院発行の5万分之1地図「高瀬」「隈府」参照。





\*『隋書』(581~619)の時代に、早くも日本の都城には、「朝堂院」が存在していたことを推測させる。

(13)

第14図 推古朝の小墾田宮想像図

〔注〕 ①推古紀16年8月条〈朝庭〉〈庭中〉〈大門〉。同18年10月条〈朝庭〉〈南門〉〈庭中〉

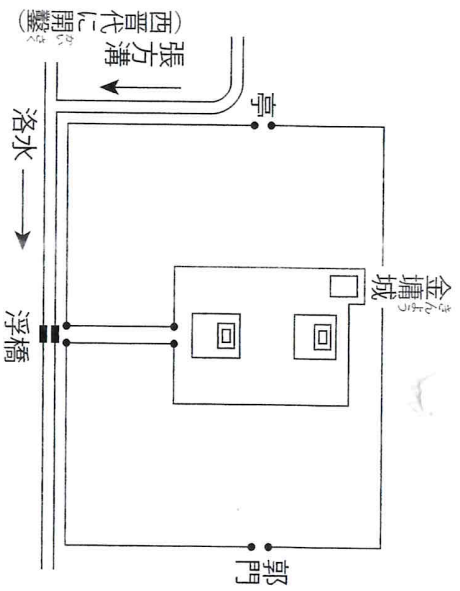
〈廳 (政庁)〉。同20年是歲条〈南庭 (紫宸殿の前庭 (広辞苑「南庭」))〉 参照。

②「長安から平城へ」江上波夫編、平凡社、15～16頁 (岸俊男氏執筆部分) 参照。

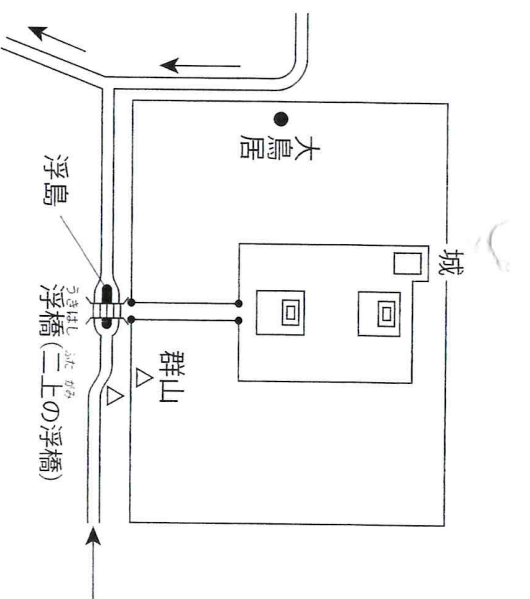
③往古には、「南宮」の北方に「北宮」があったのだろう、と推察される。「南庭」「南庭」「南門」は、宮城内に「南宮」「北宮」の二宮があったことを示唆しているように思われる。

④朝堂院の南正門を、「中門」とも呼称するという。「よみがえる平城京」坪井清足監修、日本放送出版協会、86頁(参照)

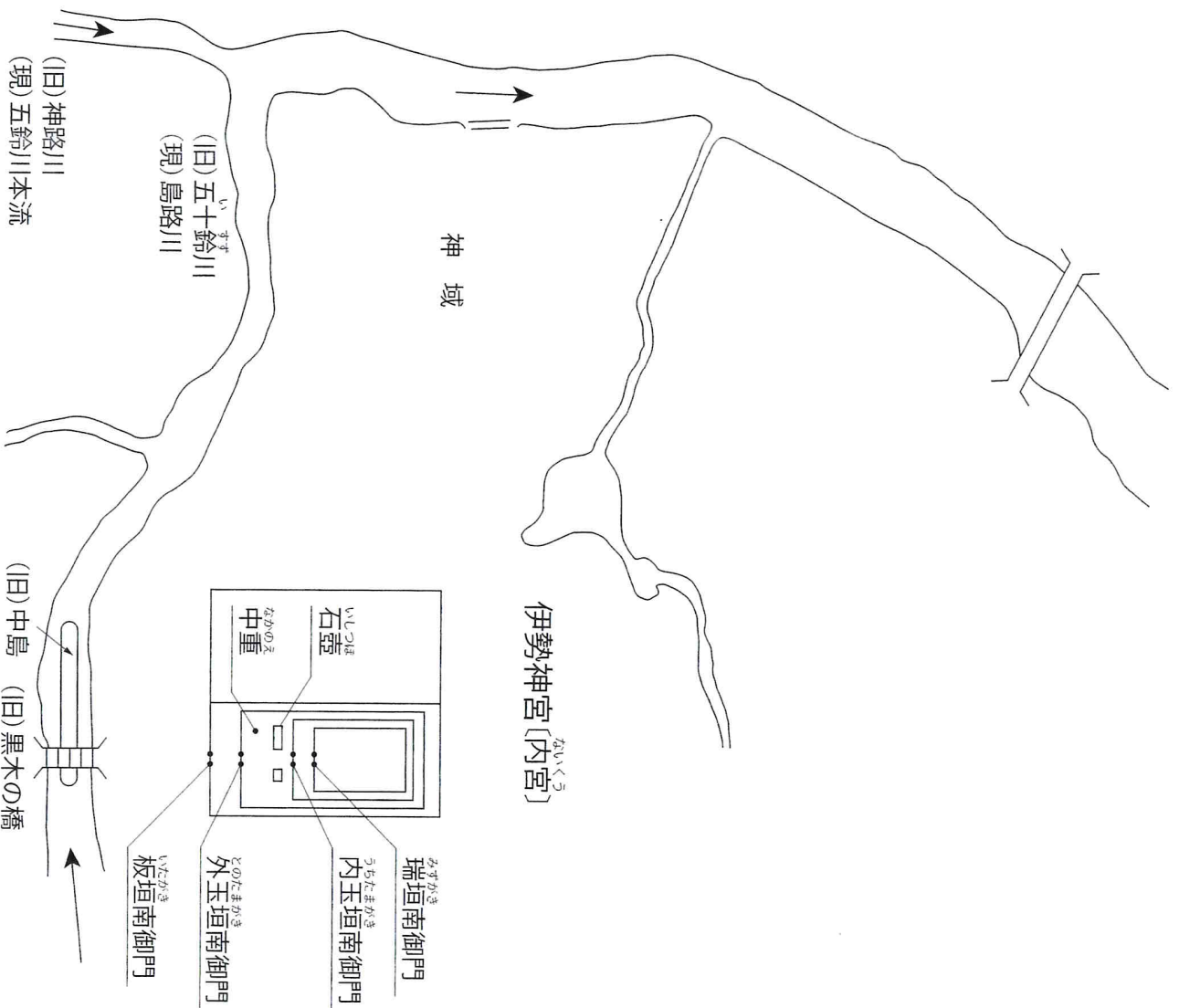
\*南北方向に並ぶ五つの正門のうち、真中に位置しているから「中門」とも呼ぶのであろう。



洛陽の都想像図

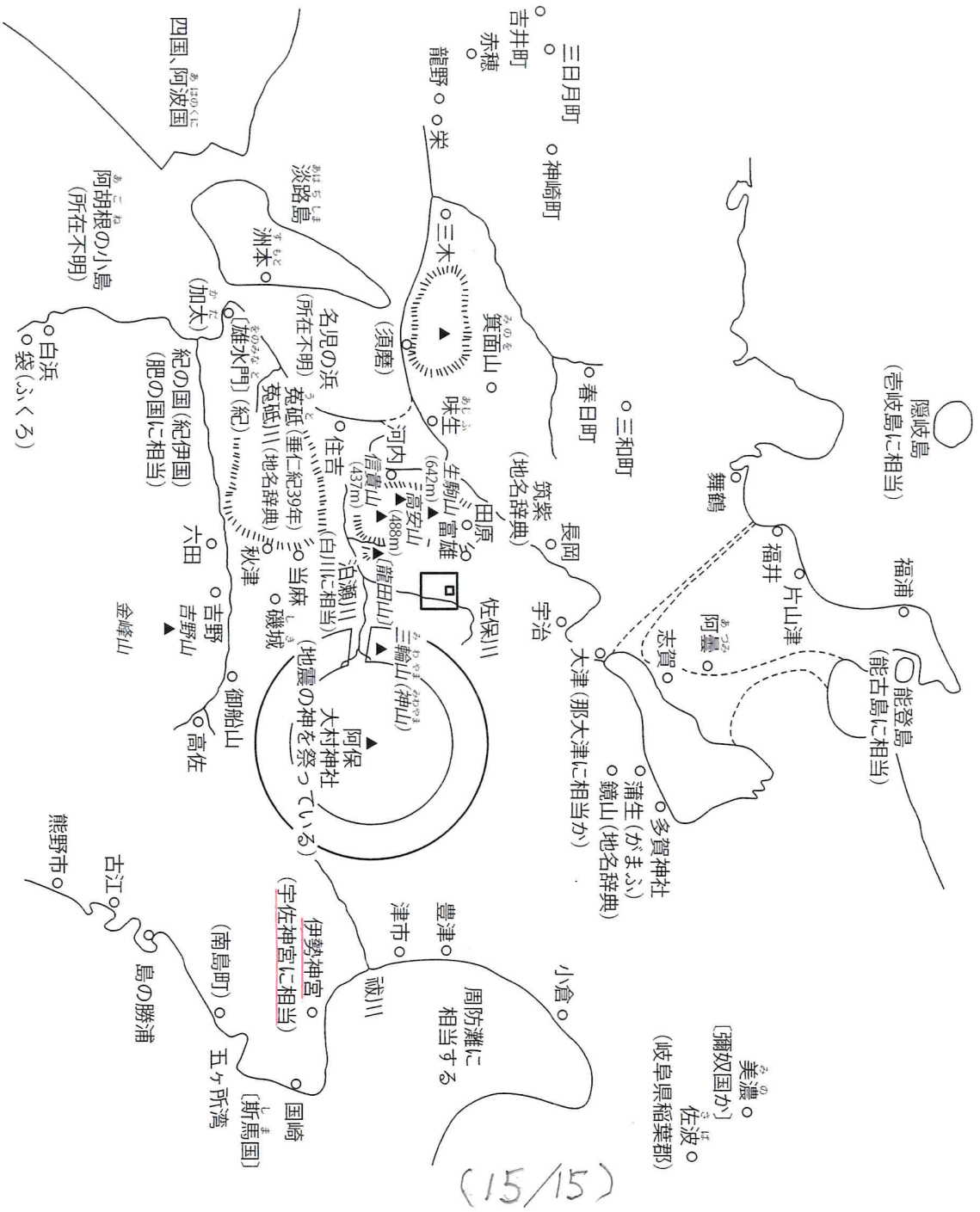


邪馬台国の都想像図



(14)

第16図 洛陽の都・邪馬台国の都・伊勢神宮の平面構想



第18図 大和国を中心とする近畿の地図







写真図版 8 肥後国鹿本郡大字円台寺の『菱形ノ池』

鹿本郡植木町役場 産業振興課課長 永田裕人氏提供。(平成21年3月撮影)

・小川の中 (川幅を広げた浅い小川の中、左岸近く) に『菱形ノ池』がある。

・上流から流れてくる土砂をくいとめる為の防護堤が、左 (上流側) に設けられ

ている。

『神皇正統記』心神天皇条に、

「欽明天皇の御代、八幡神 (心神天皇) が肥後国菱形池ヒいう所を始

あらわれた。後に、豊前国宇佐宮に鎮判給うた。」

と記されている。



第10表 「推古朝」の寺院建立等一覧表

西暦(年)	元号(年月日)	経緯
593	推古天皇 元年4月10日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・厩戸皇子立太子(20歳)。(紀等)</li> <li>・*是歳「四天王寺」を玉造に造り始めたか。(紀・補闕記等参照)</li> <li>・等与刀弥々大王、小国日辺日本国の王「鞆敷王」として即位か。(紀・伝暦・他参照)</li> <li>・上宮聖徳皇、伊予の湯に幸行す。(風土記)(九州へ向かう途中、伊予に立ち寄られたのである)</li> </ul>
594	2年2月1日	
596	4年10月—	
598	11月— 6年4月15日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・九州(肥後国)に「法興寺」完成か。(紀参照)</li> <li>・上宮王、勝鬘経を講き、播磨国の田300余町を「法隆寺」の地と為す。(法王帝説)</li> <li>〔用明〕上皇の為、九州(肥後国)に「法隆寺」の建立が企図されたか)</li> </ul>
600	8年—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・倭王、隋に使者を遣わす。(隋書倭国伝)</li> </ul>
601	9年2月—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大和国に「斑鳩宮」の造営が企図される。(紀参照)</li> </ul>
603	11年2月— 10月4日 11月— 12月5日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大將軍(西の国の皇太子押坂彦人皇子)と將軍來自皇子、薨去か。(紀)</li> <li>・都を豐浦宮から小墾田宮に遷す。〔推古天皇の都は九州(肥後国)にあったのだらう〕</li> <li>・大楠おとび敷を作り、また成嶺に糸がく。〔即位のときなどに、大楠をたてること、後の例である〕(紀)</li> <li>・冠位12階を制定する。(紀)</li> </ul>
604	12年1月1日	<ul style="list-style-type: none"> <li>〔冠位12階は、東西二期の朝臣達を一序列下に置く為に定められた、と考えてみたい〕</li> </ul>
605	13年4月1日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冠位を始め賜う。(紀)</li> <li>・*恐らくこの頃、等与刀弥々大王は、備后(皇太子)となられたのであろう。(補闕記等)</li> <li>・皇太子、憲法17条を作る。(紀)</li> <li>〔一朝の世となった当初に、「朝臣達の心得」として作られたのではなからうか〕</li> <li>・*製作鳥を、「元興寺」の丈六の仏を造る工とする。(紀)</li> </ul>
606	10月— 14年4月8日 7月—	<ul style="list-style-type: none"> <li>〔大和国に「元興寺」建立が企図されたのである〕</li> <li>・皇太子、大和国の「斑鳩宮」に遷る。(紀・伝暦)</li> <li>・*用明上皇が、「宇 速く斑鳩」に遷る。朕の快からざる所なり」と仰せられたのだらう。</li> <li>・*花祭(誕生会)の造の日 九州の「法隆寺」の為の銅の仏像(薬師如来像)と、大和国の「元興寺」の為の續の丈六の仏像とを、並びに造り終わったが。(紀参照)</li> <li>・是歳(7月以前に) 推古天皇から賜った播磨国の水田100町は、大和国の「斑鳩寺」に納められたのであるか。(紀)</li> </ul>
607	15年—	<ul style="list-style-type: none"> <li>〔当初の「斑鳩寺」(若草伽藍)の造営が企図されたと思われる〕</li> <li>・『法隆寺』のもともとの本尊であったという薬師如来像の開眼式が行なわれ、任え奉ったのである。う。(薬師如来像光背銘参照)</li> </ul>
608	16年8月3日	<ul style="list-style-type: none"> <li>〔この頃、九州(肥後国)に「法隆寺」が完成したと想像される〕</li> </ul>
609	17年4月8日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・隋の書「世世清」等京に入る。(紀)</li> <li>・〔花祭の〕是の日、大和国の「元興寺」の金堂内に、製作鳥が丈六の仏像を入れたのである</li> <li>う。(飛鳥大仏銘文・紀参照)</li> </ul>
610	18年4月30日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・*夜半に、大和国の「斑鳩寺」(若草伽藍) 炎上。(補闕記参照)</li> <li>・*この時、もともとの釈迦三尊像が火中し、小片に砕けたのである。</li> </ul>
622	30年1月22日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聖徳太子葬持</li> <li>・*釈迦三尊像葬持。焼けた釈迦三尊像を基にして、再造することになったのである。</li> </ul>
623	2月22日 31年3月半ば	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聖徳太子薨去。(49歳)</li> <li>・*釈迦三尊像、葬持からわずか13ヶ月あまりで完成。(釈迦三尊像光背銘参照)</li> </ul>
628	36年3月7日	<ul style="list-style-type: none"> <li>〔この頃、「斑鳩寺」(現存する大和国の法隆寺)が再建された、と推察される〕</li> <li>・推古天皇、崩御(75歳)。(推古朝の創建以来一度の火災に機会といわれ)</li> </ul>
669	天智天皇 8年 冬	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大和国の「斑鳩寺」に火災。〔講堂・回廊北半部が焼失し、この時、釈迦三尊像の大光背が損傷したと思われる。また、五重塔4階に飛火したものの、消火されたのではなからうか〕</li> </ul>
670	9年4月30日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・*夜半之後に「法隆寺」炎上。(紀)〔推古18年(610)の千支1巡後、つまり天智9年(670)の4月30日夜半之後に九州の「法隆寺」が薬師に付されたのである〕</li> </ul>

かの大和朝の  
庚午年

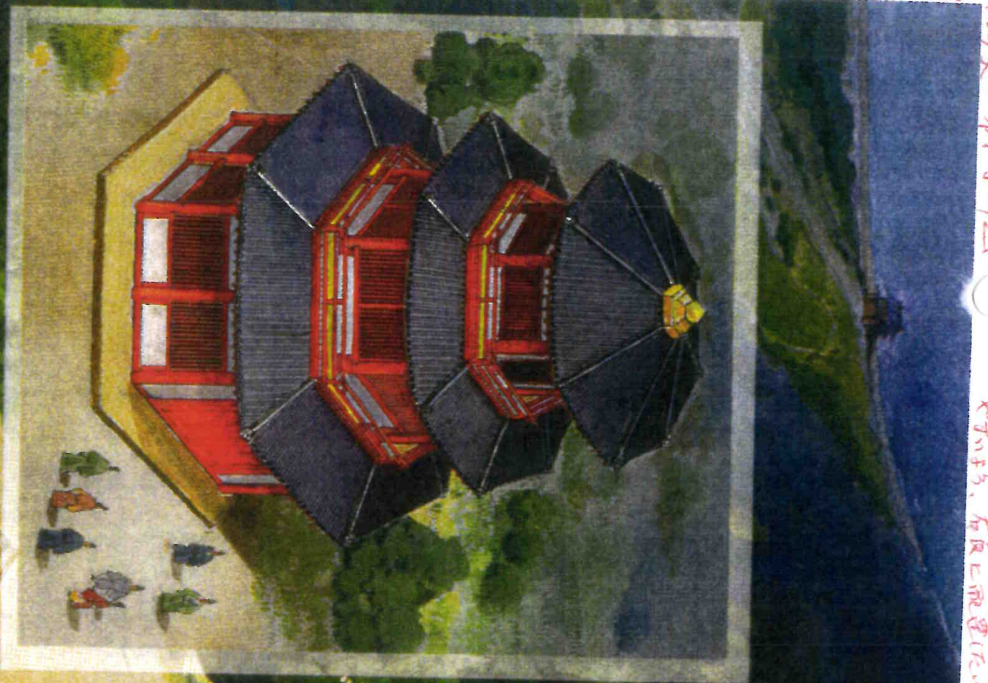




カマノ 石段の仁徳天皇  
 上段に 足狭一杯はみよ  
 17世紀  
 下段に  
 (田) 4.535<sup>9</sup> 2/4 の八角建物と見做す  
 (田) 4.535<sup>9</sup> 2/4 の八角建物と見做す

二の建物もはみよから下段に

4.535<sup>9</sup> - 1/4



八角形建物



鞠智城跡は、内城地区(55ha)と周辺部を取り込んだ外縁地区(65ha)から成る。総数64棟の建物跡や、約5300㎡の貯水池跡が検出されたのは内城地区である。この復原図は鞠智城の第2期(8世紀)で、八角形建物や、米倉、武器庫、兵舎、管理的建物が認められる。八角形建物は最上階に通信用の大鼓を置いた鼓樓跡が有力である。熊本県では、平成6年度(1994)から鞠智城跡の整備事業を進めており、この復原図も県提供の資料図面を元に作成したものである。

鼓樓?

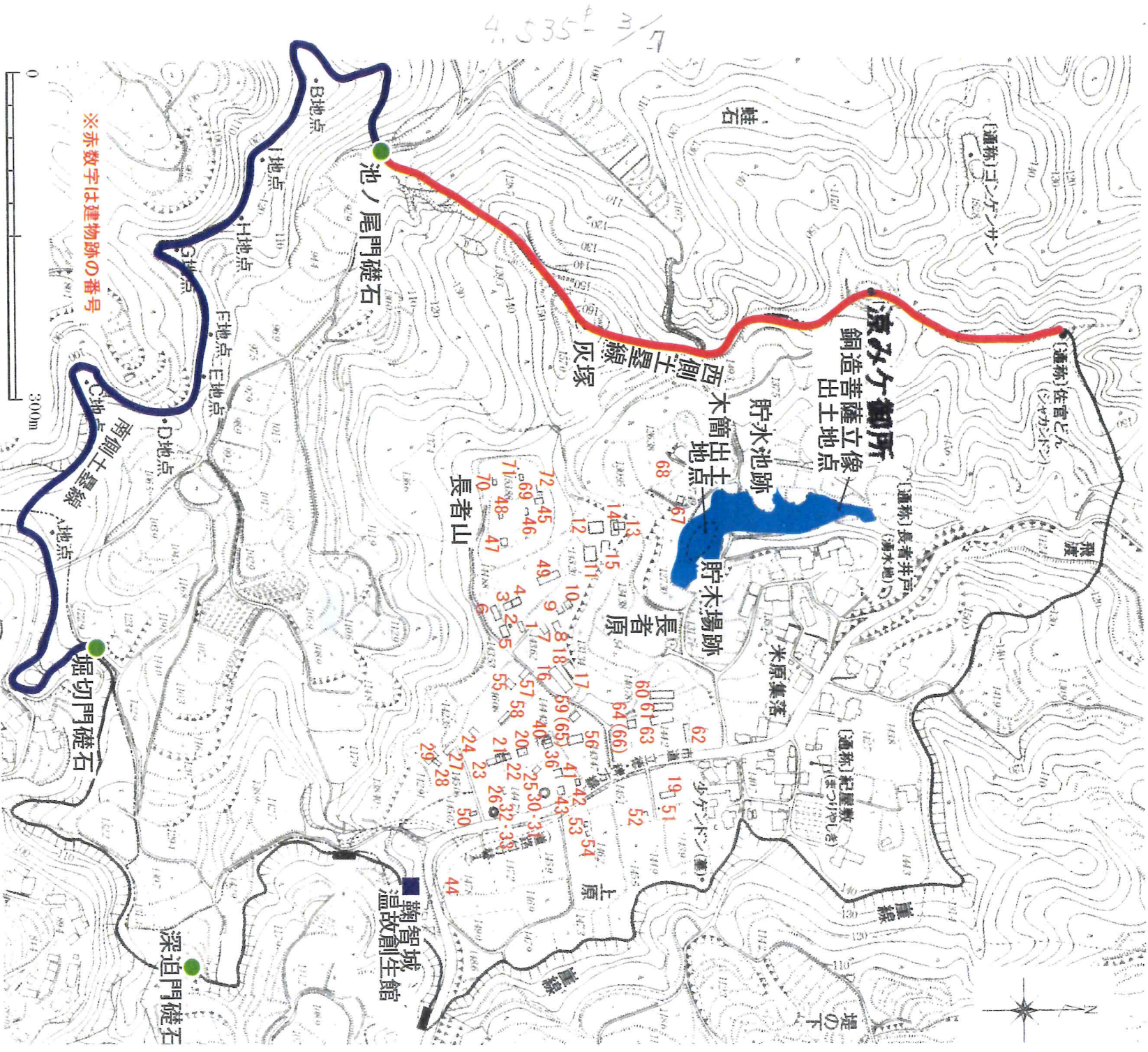
1206 1406 第489図 鞠智城

1306 西北方の尾根上に立派な建物(涼みヶ御所か)が見える。(八角形建物は又棟ある)

『図説熊本県の歴史』平野敏也、河出書房新社、1997年11月10日発行、6頁参照。

512 2/1-1669h②

この一頁全面に越え掲載下さい。



1406 第491図 鞠智城跡全体図 (狭域説)

BBG

八角形建物 (30032) は、同時期に並立していたのだらうか。3032共に1回の建替

大正14年7月13日、西側土塁線の西方の斜面に木立は、全根元から切り払われたのだらうか。

鞠智城跡 (Ⅱ) 熊本県教育委員会 平成24年3月23日発行 第1図65~69頁

## 新・やまと物語

こが けいさく  
古閑 炯作



(日本の古代史の常識が変わる。)

<https://www.shinyamato.net>



# 新・やまと物語

(日本の古代史の常識が変わる)

古閑朔作(こがけいさく)

日本書紀や古事記は、

「天照大神の血筋を引く子孫のみが、天皇になれるのであって、他の者は、何人も、天皇にとつて代わることは出来ないのだ」と述べ、「万世一系の理想の系譜」を掲げている、と言えましょう。

とはいえ、記紀などを入念に読むと、何度も、＜東西の二朝時代＞が出現したようです。

(応神天皇崩御直後・雄略朝後の複数回) つまり、記紀は、＜二朝時代＞があったということを感じ、【万世一系の理想の系譜】に書き替えているのではないのでしょうか。

あえて言えば、中国で幾度となく繰り返されている「禪讓」が、我が国へ到来しないように願って、【万世一系の理想の系譜】を創作したと思われる。

その絶大な効果は、今までの日本の歴史が、如実に物語っています。日本に、「禪讓」が入り込むことは、決してありませんでした。

世界中を見渡してみても、他に例をみない【こころみ】だといえましょう。

「新・やまと物語」第1巻・第2巻を読まなくても、第3巻等々、どこからでも御閲覧下さい。きっと、ご理解いただけると思います。

10

## 第1巻



多数の文献・資料を駆使して、新たに活写する本格的な日本史の研究書！

※第1巻は、天地開闢・激動の黎明期・極東地域にみられる各種文化について、興味深い新説を展開します。

- 出版しております。本屋でご購入ください。
- [各地域の]中央図書館 [レファレンスコーナー] に電話し、近くの図書館へ転送してもらおうと、大層便利です。

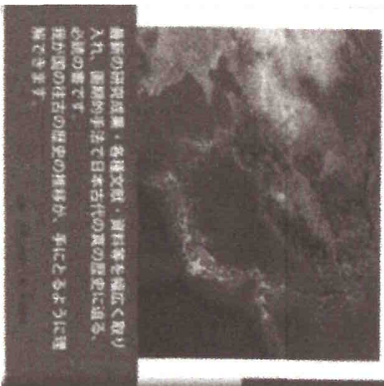
## 第2巻

※第2巻は北九州～近畿地方の遺跡が語る激変の時代。東西二つの文化圏の対立【当初の弥生人と、海中の王となった箕

↓  
コボク

# 新・やまと物語 (2)

古南創作



子 (遼寧系殷民の子孫) との対立】 (倭) (乱以前の対立) について、興味深い説を提示。

• 出版しております。本屋でご購入ください。

• [各地域の]中央図書館【レファレンスコーナー】に電話し、近くの図書館へ転送してもらおうと、大層便利です。

※インターネットでの閲覧はこちらへ (第3巻の目次を見てください)

第3巻

第4巻

第5巻

第6巻

第7巻

第8巻

第9巻

第10巻

第11巻

第12巻

第13巻

## 関連キーワード

古閑炯作, やまと物語, 夜白, 邪馬台国, 極南界, 奴国, 倭国大乱, 日本書紀, 古事記, 旧事記, 天照大神, 八咫鏡, 草薙剣, 宇佐, 宇佐神宮, 伊勢, 伊勢神宮, 内宮, 外宮, 神功皇后, 応神天皇, 仁徳天皇, 大國主, 出雲, 国譲り, 書籍, 電子書籍, 本, 歴史, 沖ノ島, 宗像, 三女神, 高千穂, 瓊瓊杵尊, 神武天皇, 崇神天皇, 垂仁天皇, 神功皇后, 八咫鏡, 草薙, 須佐之男, 素戔嗚, 勾玉, 曲玉, 伊弉諾尊, 田道間守, 橘, 吳竹, 四方拝, 開聞岳, 三雲, 井原, 平原, 糸島, 成川, 任那, 岩戸山, 盤井, 大和物語, 志賀, 金印, 倭委奴国王, 關, 朱雀, 十二門, 隅田八幡, 武寧王, 七支刀, 七枝刀, 風流島, 裸島, 不知火, 龍宮, 竜宮, 浦島, 浦島太郎, 乙姫, 亀姫, 亀山, 玉手箱, 高津宮, 大隅宮, 三輪山, 大神氏, 大神神社, 住吉, 住吉神社, 蘇我馬子, 入鹿, 武烈天皇, 法興寺, 元興寺, 推古天皇, 小墾田宮, 等与刀弥々大王, 聖徳太子, 十二階, 道後温泉, 広隆寺, 太秦寺, 法隆寺, 再建論争, 鳥仏師, 止利仏師, 葉師如来, 釈迦三尊像, 金人, 夢告, 百濟観音, 救世観音, 玉虫厨子, 十七条, 香久山, 三山の歌, 大和三山, 大和三道, 明日香, 飛鳥, 四天王寺, 茶臼山, 斑鳩寺, 若草伽藍, 藤原京, 平城京, 平城宮, 東大寺, 倭姫命, 多賀城, 上賀茂神社, 八坂神社, 中大兄, 鎌足, 天智天皇, 大友皇子, 天武天皇, 壬申乱, 裊田阿礼, 阿蘇, 大津皇子, 和氣清麻呂, 道鏡, 小野小町, 遍照, 瀧原宮, 二見, 夫婦岩, 柿本人麻呂, 難波, 浪花, 猫間川, 都府楼, 大宰府, 観世音寺, 有明の月, 有明海, 海石榴市, 龍田山, 二上山, 堀江, 堀川, 白川, KADOKAWA

カウンター：0300